

姫どいやさ祭

七月二十七日、二十八日



夜も昼も
町が一つに



「シナイ」と呼ばれている装飾。建物の梁や廊下などに沿って細く切った紙を放射状に貼り、奥行きを出す。細かいものは1mmほどしかない。
(6月19日) ▼ ▶



祭り当日だけでなく準備も力をあわせる

7月27日、28日の両日、姫で「どいやさ祭」が行われた。

27日夜、袖キリコに灯りが入る。町中を幻想的に進み、姫3町内の袖キリコ計6台が漁港に集結。ここで袖キリコの車輪を外し、ツンボ（積棒）と呼ばれる丸太を通す。3台のキリコを1基つつ「ヨイトショー」と皆で声を合わせ、伝馬船上に担ぎ上げる。伝馬船に乗ったキリコは、海面にゆらゆらと灯りを反射させながら、幻想的に漁港内を行き来した。

翌28日は午後2時からキリコの運行が開始。姫向浜（むかひはま）からトンネルを抜け、漁港を目指す。漁港では斜路を利用し、キリコを海に滑り落とした。綱を架けて丘に引きあげ、また海に落とすというのを何度も繰り返し、祭りは日が落ちるまで続けられた。

祭りに欠かせない袖キリコ。姫向浜のキリコ絵は今井和人さんが5月から作業を続け完成させたもの。制作7年目の今井さんは今年、初めて絵を描く若手の指導にもあたった。

細かい線を描き、それに沿って溶かした口ウを筆で書き入れるなど、細かい作業の連続。連日作業が続いても、今井さんは「ほかの人よりふた月長く、祭りを楽しんでいる」と話す。

言葉の一つ一つから、地域への熱い思いが伝わってきた。



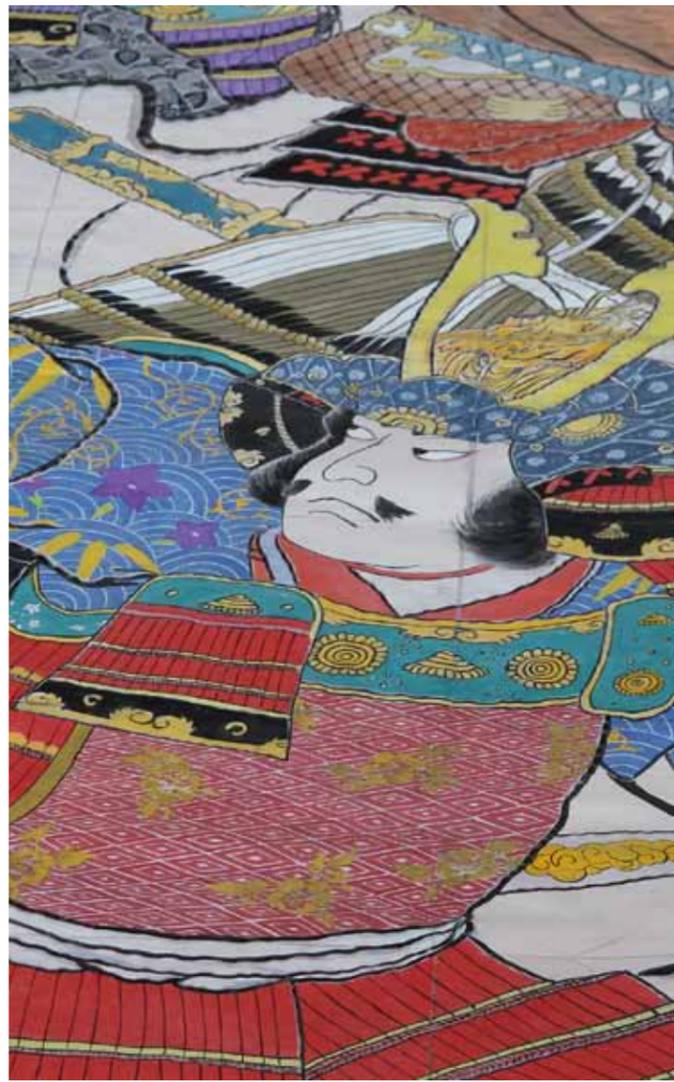
▲ 主役の3人物に色を塗る。仕上がり直前に目を入れ、化粧を施す。
(5月29日)



▲ 姫栄会の太鼓は恒例行事。
小学生にも教え、同じ舞台上で披露させている（7月28日）



▲ 線に沿ってロウが引かれる。ロウの温度が高すぎると筆が傷み、低すぎると紙に染みこまない。何度も試行錯誤した



▲ よろいの模様や髪の毛の一本まで表情豊かに描かれている



完成したキリコ絵を広げ、仕上がりを確認する宮下さん一家



(左から) 宮下吉和さん、娘の羽衣子さん、妻のさやかさん

故郷の祭りを盛り上げたい

作業を開始した。袖キリコ製作の経験はなく、筆選びや絵の具の準備など、ほとんどが手探りの状態。幼なじみに電話で確認するなど試行錯誤を繰り返した。作業場所は座間市の福祉センター会議室。紙を折りながら部分ごとに作業を進めた。自宅から離れているため娘の羽衣子さんも同行、2人の作業を見守った。

通勤に2時間を要するため平日は多忙。作業に充てられるのは土日などの休日のみ。多くの制約の中、約半年を経て8月4日に無事完成を迎えた。吉和さんは「床にかがんで書くことが大変だった」と作業を振り返る。さやかさんは服や足袋の柄を描いた。インターネットで着物の模様などを調べ、徹底的に細かく書き込んだ。腕一本を描くのに1日を要したこともあったという。

盆の時期、小木地区町民研修センターで各町内の絵付け作業が続いている。下絵が並ぶ作業場に登場した宮下さんの作品は、驚きをもって迎えられた。早くも来年の絵を期待する感想も飛び出したという。来年の制作は「未定」としながらも「念願がかなった」「やりがい、達成感を感じた」と吉和さん。祭り当日、自分の絵がどのように町を彩るか、心待ちにしている。

小木の袖キリコ絵を神奈川で作成
宮下 吉和 さん
さやかさん
(神奈川県座間市在住)

小木出身で神奈川県座間市在住の宮下吉和さんが、「小木袖キリコ祭り」(9月21日、22日)のキリコ絵を完成させた。

小さな頃から絵を描くのが好きだったという宮下さん。勇壮な祭りを彩るキリコ絵の制作に憧れを抱き続けてきた。高校まで小木で過ごしたのち、進学を期に故郷を離れ、会社員として全国各地へ。小木への想いは強く、祭りには毎年参加している。長年の夢であるキリコ絵制作が実現したのは妻の存在が大きい。妻のさやかさんは中学・高校と美術部で活動した経験があり、力強い後押しとなった。

構想を練り始めたのは、祭りが終わった直後の昨年10月にさかのぼる。題材に選んだのは「頼光大江山入之図」。源頼光が酒吞童子を退治するために、四天王とともに大江山に乗り込む、迫力ある浮世絵である。「四天王」には神奈川ともゆかりの深い坂田金時が含まれている。

キリコ絵の和紙は縦約5メートル、幅約7メートル。美濃紙を約350枚継いだもので非常に大きなもの。宮下さんの意向を受けて下浜第2・4町内会は、通常6月頃に行われる紙継ぎ作業を前倒しして、用紙を準備した。能登から紙が届いた今年3月、本格的に